

奈良県立医科大学 学生ボランティアバス 活動報告

1 概要

学生20名教職員4名は、平成23年8月26日（金）から29日（火）の5日間（現地では丸3日間）、東日本大震災の被災地である福島県を訪ね、相馬市、南相馬市において仮設住宅の集会所で行われる仮設サロンでの傾聴活動、健康調査のボランティア活動に参加、福島県立医大救急科島田先生にDMATについて、整形外科大谷先生に放射線の影響や福島医大の状況、宮崎先生に除洗棟について、南相馬市立総合病院長金澤先生に発災直後の同病院の医療活動について講義を受け、震災発生後の福島県内の医療について理解を深めた。



福島県立医大の学生からは、被災直後や被災後のボランティア活動についての活動報告を受け、交流会では学生相互の交流をした。また、南相馬市の港湾施設、原子力災害対策法に基づく警戒区域の立ち入り制限の検問所などを視察し、被災地の現状、復旧状況を確認した。

帰路のバスの中と9月8日に今回の活動について振り返り、成果、問題点、今後の活動などについて話し合いをもった。

今回ボランティア活動に参加した学生は皆一様に自分に何ができるのかという不安をもっていましたが、現地で積極的に活動し、いろいろな話を聞く中で震災や被災地福島に対する意識が変わり、困っている人のためにできるかぎり役立ちたいという想いが強くなった。

2 活動内容

(1) ボランティア活動

ア 仮設サロンでの傾聴活動

28日午後には南相馬市で学生20名教職員3名が2班に分かれ、29日午前には相馬市、南相馬市で学生16名が3カ所に分かれ、仮設住宅の集会所で開かれる仮設サロンで、血圧測定、傾聴活動を行い、健康や生活の不安、避難所での生活などを伺うとともに、せんとくんによる慰問も行い、集会所に来られた高齢者、子供たちと交流した。

あまり眠れない、新たな場所での生活に慣れない、これからの生活がどうなるかわからないといった不安を訴える方が多く、心のケアがまだまだ必要であると実感した。

子どもたちはあまり外で遊んでいないためエネルギーをもてあましている様子で、室内で非常に元気よく



遊んでいた。

ある意味で仮設サロンに来られる方はまだ問題は大きくないほうで、体が不自由で仮設サロンに行けない、仮設住宅などにひきこもってしまっているといった人のほうが、より多くの支援を必要としているのではないかと、仮設サロンだけではすべてのストレスは解消されないのではないかとと思われる。

イ 健康調査

29日午前、学生3名、教職員1名は、南相馬市保健センターが実施している避難住民の健康調査に同行した。事前に配布した健康調査票を回収し、健康状態を確認するという内容であった。調査の対象者は、元々原発の警戒区域で生活をしていて、この1～2週間で避難所などから仮設住宅に移ってきた方が多く、どこで診療を受ければよいか、以前に診てもらっていた医師に診てもらえないといった相談もあった。

参加学生の中には、専門的な知識をしっかりと身につけ、地元の医療の状況にも詳しくなければ、ボランティアとしての参加は難しいのではといった意見もあった。

(2) 講義、講演、視察

救急科の島田先生からは、災害時の医療、DMATの役割について講義を受けた。発災直後の患者の受け入れ状況、DMATの参集と活動状況、原発の警戒区域が設定され立ち入り制限、避難指示がでてからの患者搬送の状況などについて詳しく説明を受け、災害急性期の医療について理解を深めた。震災前の訓練により、スムーズに広域搬送ができたとのことだった。

整形外科の大谷先生からは、福島医大の行った災害医療、放射線の基礎的知識、原発問題によって福島県に与えた影響、福島医大の教育・研修に与えた影響、福島医大の責務、今後の活動（県民健康管理調査）などについて講義を受けた。大谷先生は、福島の現状を知ってもらいたい、福島のサポーターになってもらいたいということを強調されていた。

放射線科の宮崎先生からは、除洗棟において放射性物質を除洗する手順の説明、原発事故での被爆者受け入れの状況の説明などを受けた。

南相馬市立総合病院長、金澤先生からは、被災直後の診療の状況、原発事故の際の病院の対応、その後の病院の取り組みなどについて説明を受けた。

福島医大医学科の学生からは、発災直後の学生ボランティアの活動について説明を受けた。学生ボランティアの招集、大学との連携、他県から受け入れたDMATチームの対応、原発事故直後の学生ボランティアの解散と再編成の状況、避難区域からの受け入れ患者の搬送の際の状況などを話してくださった。

他にも、避難してきた子供たちを対象としたボランティアの活動内容や避難所の状況、子供たちの精神的な状態などについて話された。学生という立場のため、5月以降、授業が始まると、学業、課外活動などで、ボランティア活動に取り組むことのできる時間が減ってしまったとのことだった。また、「震災を風化させないでほしい」と訴えも聞き、参加学生はこの想いを持ち帰って伝えなければならないと強く感じた。

また、春期休暇中に地元で行った募金活動についてどのような募金活動行ったかや問題点、改善したあとの結果などについて報告を受けた。

活動は日経メディカルオンラインにも掲載されているが、実際に話を聞いたほうが内容も濃く細かなニュアンスも伝わってきて、実際の活動の大変さを感じることができた。

3 成果

(1) 被災地の現状、ニーズの把握

8月下旬での福島県の現状について実際に自分たちの目で見ることができた。復興に向けて徐々に進んでいるものの、まだ撤去されていない船や車、折れたままの大きな鉄塔や電柱がみられた。

相馬市、南相馬市は、原発の警戒区域から避難している人が多い。この地域の人は農業を営んでいた人が多く、避難所では農作業をすることがないので運動不足となり、運動器症候群（ロコモ）につながることもある。かかりつけ医に診てもらえなくなったことや、健康上の不安を訴える方も多かった。

仮設サロンは、通常は社会福祉協議会（社協）の若干名で行われていることが多いようである。福島県の海岸沿いはもともと人の少ない地域であり、問題を抱えている被災者の声を吸い上げる人も不足しているように感じた。今回のように、ボランティアとしてある程度の人数で参加すると、少ない人数では聞き取るこのとのできない話も聞くことができると感じた。

現場の状況を自分の目で見て現地の人と話すことで、避難や復興の状況、ニーズの変化を感じ取ることができた。

(2) 参加学生の心理的变化

「講義で福島県の放射能汚染は一部地域を除いて基準値を下回っていること、メディアの報道よりも安全であることがわかり、福島県に行くことに対する不安は自然となくなっていった。」「土木作業や避難所・仮設住宅で何らかの形で支援することがボランティアだと思っていたが、何をすると決まっているものではなく、被災地の方々をおもってする全てのことがボランティアだと考えが変わった。自分のできる1番のボランティアは見聞きしたこと感じたことを伝えること。」

参加学生は共通して、福島の原子力災害に対する不安が軽減し、ボランティアは小さなことでいいから行動すればよいと考えるようになった。

(3) 福島医大生との交流

福島医大生によるボランティア活動の報告と交流会での交流を通して、福島医大生が伝えたい思いがあることを知った。引き続き交流し情報交換することで、その思いをできるだけ多くの人に伝え、福島や福島医大に貢献したいと気持ちが変わった。

4 今後の活動

福島の復興の支援と福島医大生との交流を継続するために、災害ボランティアのグループを立ち上げることとした。ボランティアに参加したい学生が誰でも参加できる組織にしたい。